

Exhibit No. 161

11521-1

北米合衆国及他ノ國々

對

荒木貞夫及 他ノ人々

余、大妻他ハ左ノ東道が良賢デアル事ヲ自己ノ良心ニ照ラシテ誓言ス。

余ハ現在國會議員デアリマス。千九百三十一年（昭和六年）及千九百三十二年（昭和七年）ノ期間私ハ私ノ父タル、大總理大臣ノ秘書官デアリマシタ。千九百三十二年（昭和七年）五月十五日ニ父ハ身体が好クアリマセンデシタノデ私ハ父ノ爲ニナルト思ハレル京榮館ノ食店ヲセントシテ當時ノ閣總理大臣官邸ヲ雇レマシタ。而シテ此ノ時事ノ爲メ外出中ニ總理大臣が日本人ノ海軍士官ニ修リ射撃サレタル事ヲ使ノ者ニヨリ知ラレマシタ。私ハ直ニ總理大臣官邸ニ歸リマシタ其所ニ私ノ父ハ重傷ヲ負ヒ然シ未ダ生キテ居ルノヲ見出シマシタ。彼ハ私ニ日本人ノ海軍士官差ガ無理ニ官邸ニ押シ入り彼等ノ一人ガ父ヲ撃ツタト告ゲマシタ。

總理大臣トシテ私ノ父ノ在官中彼ハ如何事理ノ據大ニル事ニ成リマシタ。而シテ此ノ時日本軍ノ撤退サルノ事ハ私ニ知ラレマシタ。而シテ此ノ時日本軍ノ撤退サルノ事ハ私ニ知ラレマシタ。而シテ此ノ時日本軍ノ撤退サルノ事ハ私ニ知ラレマシタ。

RETURN TO ROOM 361

記傳ヲ讀ミマシタ。況ハ又此書ニ提出サルベキ條
 テノ間題ヲ總理大臣タル私ノ父ト斷言シマシタ
 私ハ尙父ノ経歴及記傳ヲ整理シテ保管シ且ツ父
 ノ條テノ通信文ヲ熟リ讀ヒマシタ。相續事務勅命
 數ヶ月後ニ父ハ總理大臣タル後トシテ山下ニ謁見
 シ閣前ニ依リ謁見ヨリ軍機ノ待遇ヲ變遷サル様様
 下ニ通言セント決心致シマシタ。此ノ政策ニ從ヒ
 犬養總理大臣ニ山下ハ謁見ヲ附リマシタが軍機ヲ
 謁見ヨリ撤退スル事ニハ成功シマセシデシタ。
 犬養總理大臣ノ在ノ政策ハ福澤タル信託國家ノ承
 継ニ反對スル事デアリマシタ。ナゼナレバ斯ル承
 継ハ支那ノ主權ノ侵害ナリト思考セシ故デアリマ
 ス。犬養總理大臣ハ支那共黨軍ノ父タル孫達仙傳
 士トハ親交ガアリ周氏ハ屢々東京ニ來リ犬養總理
 大臣ヲ訪レマシタ。當時問題ノ解決ニ熱中シテ私
 ノ父タル總理大臣ハ内密ニ使ヲ南京ニ派シ蔣介石
 將軍ト交渉セシメマシタ。此ノ交渉ハ賄賂體面ヲ
 以テ總理大臣ニ選任シマシタガ不幸ニシテ其ハ
 京都ニ依リ催促サレマシタ。内閣書記館長ハ政友
 會内軍閥派ノ先頭登タルハ森田氏、デアリマシタ。
 首記ノ森氏ハ政府ニ直リテ總理大臣ノ官任及待遇

ニ於ケル武力政變ニ對スル反抗的政變ハ無理ノ事
ニ取リ置タレバデアル事ヲ自分ニ悟シテクレマ
シタ。是等状況ノ會話ノ中ニ前記孫氏ハ若シ私ノ
父ガ反軍部の政變ヲ企圖スルナラバ父ノ命ハ守全
ナラザルベシト言ヒマシタ。

尙ホ軍部ヨリ反軍ノモターツノ理由ハ上記孫氏ノ
説明ニ依レバ大坂内閣ノ陸軍卿ヲ制定セントス
ルノ政變デアリマシタ。

新ノ政變モガ陸軍卿ヨリ反軍セラレマシタ。當時
ノ陸軍大臣ハ荒木貞夫大將デアリマシタ。自派本
部次長ハ眞崎三郎大將デアリ軍務局長ハ小磯國
助少將デアリ陸軍次官ハ小川平助中將デアリマシ
タ。

千九百三十二年（昭和七年）五月八日私ノ父タル
大佐任大佐大臣ハ其時ニ於テ反軍部の政變ヲ豫シマ
シタ。其演説ノ中ニ「ファシズム」ヲ暴制シ民主
政手續ヲ繼續シマシタガ彼ハ其ニ基レヨリ一
面々ニ東京ノ總理大臣任職サレマシタ。是
ガ後ニ「五月十五日事件」ト呼バレタデアリマ
ス。

Doc. 11524

上記 **大森健** へ一九四六年（昭和二十一年）
八月十六日陸軍省ビル内ニテ本官ノ面前ニテ宣
誓ノ上本供述書ニ署名セリ。

證 明 書

予ト **トマスロイツ** へ茲ニ左ノ如ク證明ス。予ハ日英
兩國語ニ通曉シ且本日前記供述書ヲ上記 **大森健**
健 ニ日本語ニテ讀ミ聞カセタリ。

之ヲ爲スニ當リ予ハ前記供述書ノ内容ヲ英語ヨリ
日本語ニ忠實且正確ニ翻譯セリ。右 **大森健**
健 へ該供述書ノ内容ガ眞實ナル旨並該供述書ニ宣誓
ノ上快ク署名スル旨述べタリ。右ハ予ノ面前ニテ
正式ニ宣誓シ且供述書ニ予ノ面前ニテ宣誓ノ上署
名セリ。

該宣誓ヲ爲シ且該供述書ニ署名スルニ能イテノ凡
テノ手續ハ日本語ヨリ英語ニ、又英語ヨリ日本語
ニ忠實且正確ニ翻譯セラレ、右供述書ニヨリ充分
理解且了解セラレタリ。

一九四六年（昭和二十一年）八月十六日

日本國東京ニ於テ

陸軍中尉 **トマスロイツ**